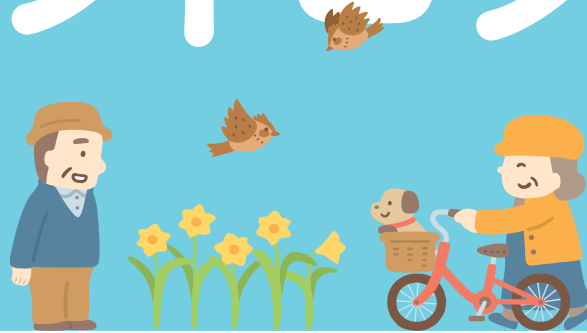


ジェロントロジー

gerontology

ジェロントロジー（老年学）とは、高齢者の生活にかかわる問題を解明し、より良い高齢社会をデザインする科学です。安藤研究室では、社会老年学、高齢者心理学、人と動物の関係学を中心に研究をしています。

横浜国立大学
安藤研究室



民主主義では選挙での投票によって政治的な意思表示がなされます。一般的に、若年層の投票率は低く、高齢層のそれは高い傾向にあります。図1には、2017

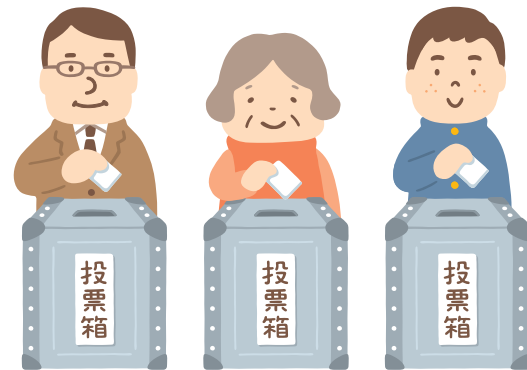
●投票率の高い高齢層

少子高齢化の進行に伴って、有権者に占める高齢者の割合が増加し、高齢層の政治への影響力が高まり、高齢者向けの政策が優先される状況を示す「シルバー民主主義」という言葉が広まりつつあります。高齢者の声を通りやすい政治により、少数派である若年層や中年層の意見が政治に反映されにくくなり、世代間の不公平感につながり、世代間の対立が深まることに懸念されています。20年も前に、内田・岩淵は「政治的決定力の重心が、事実上大きくシニア市民に傾くことによって、納税者が政治的決定の中心に位置するとみなされてきた民主政治のあり方が大きく変わる」と論じ、現役世代と年金を受け取る高齢世代の間で世代間対立が生じる可能性を指摘していました。

若者の政治参加の促進を図るため、選挙権年齢を引下げて、18歳以上の若者が選挙に参加できるようにしたり、イン

●シルバー民主主義への処方せん

年10月に実施された第48回衆議院議員総選挙の年齢階層別投票率を示してあります。20〜24歳が30.74%で最も低く、年齢が高くなるにつれて投票率が高くなり、60〜79歳までの年齢階層では70%を超えています。この選挙時点の人口推計の概算値から、投票者の約4割が65歳以上であり、その中核はリタイアして年金生活を始めている団塊の世代です。高齢層の政治への影響力は、高齢者人口の増加という人口構造の変化に加えて、高齢層の投票率の高さが関係しているのです。

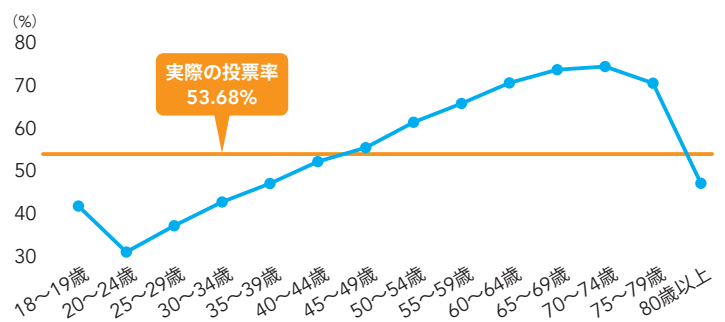


横浜国立大学・教授
安藤孝敏
あんどう・たかとし

シルバー民主主義

ターネット等を利用する選挙運動も解禁されています。これら以外にも、投票することを有権者に対して義務付ける、余命によって投票権に重みをつける、選挙区を年齢階層別に分けて各世代の代表を選ぶなどの選挙制度改革案が考えられているものの、高齢層の不利益につながる施策は実現が難しいというのが現状です。今後も少子高齢化が進展すると予想されており、その結果として、「シルバー民主主義」の状況もさらに強まると思われます。各世代に自分の負担を求め、18歳未満を含めた将来世代の声を反映する

図1: 年齢階層別投票率(全国)



第48回衆議院議員総選挙における年齢別投票状況 (抽出調査)

のは誰の役割なのか考えなければなりません。

- 1 内田満・岩淵勝好(1999)『エイジングの政治学』早稲田大学出版部
- 2 総務省選挙部(2017)「第48回衆議院議員総選挙における年齢別投票状況」(抽出調査)
www.soumu.go.jp/main_content/00052874.pdf
- 3 秋山裕之「進むシルバー民主主義 65歳以上が投票者の4割」日本経済新聞電子版 2018年2月26日
https://www.nikkei.com/article/DGXMZ026419410R00C18A2000000/

●「住民主体サービス」とは？

最近自治体のホームページや広報誌で「住民主体サービス」の「担い手」を募集しているという記事を見かけます。「住民主体サービス」は介護保険制度に位置付けられたサービスで、要支援に認定された方や、体力等に少し自信がない方などを対象としています。サービスには地域のスペースに通い、軽体操やリクリエーションなどを行う「通所型」と、自宅で買い物や掃除などをお願いする「訪問型」があります。サービスを利用する人は高齢者ですが、「担い手」としても地域の高齢者が想定されています。

●住民主体サービスが誕生した背景

日本では少子高齢化が進んでいます。

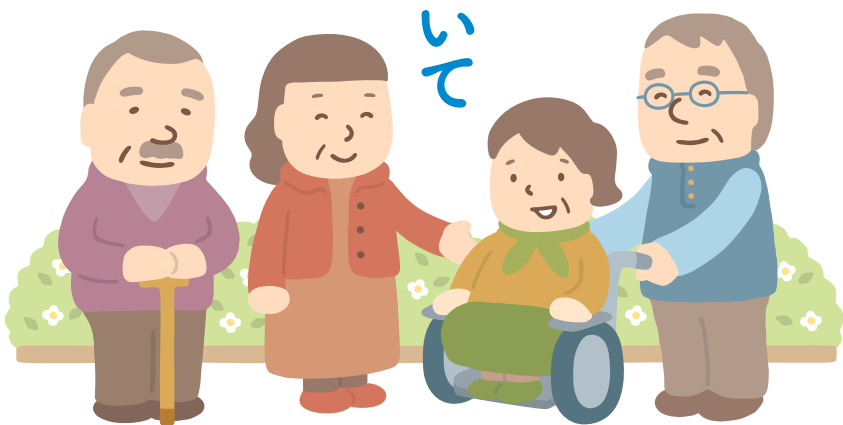


住民主体の 福祉サービスについて 考える

相模女子大学人間社会学部
社会マネジメント学科・准教授
まつぎき・きちのすけ

松崎吉之助

社会の担い手となる人の数が減り、介護等の必要性が高まる高齢者が増えると予想されています。この難しい局面を乗り切る方法の一つとして「お互いに支え合う」(互助)ことが注目されています。この「住民主体サービス」は地域の住民同士で支え合う場所として考えられました。サービスを利用する人も、「担い手」も顔なじみの地域住民であれば様々な情報交換や、サービス以外の時間の交流も活発になるかもしれません。また「担い手」となる高齢者の生きがいや健



康づくりにつながることも期待されています。「住民主体サービス」の取り組み状況は自治体によって異なります。サービスを開始している自治体もあれば、準備中、検討中のところもあります。スタートしている自治体でもその内容は様々です。もともと地域で活動していたボランティアグループなどに補助金等を出して、管理運営もすべて任せるところや、サービスの事務局は専門家や専門機関が行い、地域住民にはスタッフとして活動しても

らうパターンなどがあります。

●「住民主体サービス」の注意点

「住民主体サービス」には課題も指摘されています。住民同士の支え合いは本来自由な発想で、それぞれの関係性の中で行われるものです。しかし「制度のサービス」となると、行政が管理することになります。その結果、活動が窮屈になったり、自由な発想が妨げられてしまうことにも繋がりがかねません。またサービスを利用する高齢者とサービスを提供する「担い手」の関係も住民同士の関係から、お客とスタッフの関係に変わってしまうかもしれません。

●よりよいサービスにするために

こうした課題もありますが、住民同士の支え合いの場としての機能や、地域の高齢者の新たな役割を生み出す場としての可能性も秘めていることは確かです。新しくはじまったこのサービスが本来の機能を果たすには、管理する行政や、関わる専門家、担い手になる人、利用する人も単なるサービスと捉えるのではなく、本来の趣旨をよく理解することが大切です。

- 1 松崎吉之助(2018)『住民主体サービスの取り組み状況と今後の課題について』神奈川県内の自治体における取り組みから『仙台百百合女子大学紀要22』86-116
- 2 橋本理(2016)『改正介護保険制度と市民による助け合い活動の新たな展開』『市民福祉団体「の意義」再考』関西大学社会学部紀要48(1) 25-60

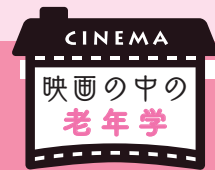
このコーナーでは、シニア層と呼ばれる世代が楽しい時間を過ごすためのヒントになる映画を、勝手に「終活映画」と呼んでしまいます。終活映画を、社会老年学（高齢者や高齢社会についての学問）のエッセンスを取り入れながら紹介します。

■『ボヘミアン・ラプソディ』

この映画は、1970〜80年代を舞台に、Queen リードボーカル、フレディ・マーキュリー（ラミ・マレック）の人生を描いた物語です。

若く無名だったフレディは、バンドメンバーと出会い、成功への階段を駆け登っていきます。フレディの類まれなるセンスと強烈な個性は、世間一般の枠をはみ出るものでした。

フレディの才能は、Queen という場を得て炸裂します。ですが、彼はまた、さまざまな「違い」に悩みコンプレックスを抱いていました。彼の並外れた才能はときに世間から理解されないこともありました。また、移民でゾロアスター教徒の両親の元でマイノリティとして育った生い立ち。ゲイというセクシャリティ。そして成功すればするほど、彼の周囲には、彼自身ではなく、彼の金と名譽と華やかさを求める人々が群がっ



第 8 回

『ボヘミアン・ラプソディ』

横浜国立大学大学院
環境情報学部・博士課程後期

木村由香

きむら・ゆか

協力：尾上正幸

〔株〕東京葬祭 取締役、

終活・エンディングノートアドバイザー／

終活映画ナビゲーター



てきます。バンドメンバーたちが結婚しそれぞれの家庭を持つ中、彼は孤独感をより強めていきます。私生活は荒れていき、バンドメンバーとも衝突し、Queen は解散寸前まで追い込まれます。そして彼は、とうとう AIDS を患ってしまった。

さまざまな苦悩の末、バンドメンバーと和解し、さまざまな有名アーティストが集うチャリティイベント「ライブアイド」に出演するまでが、この映画のストーリー。「最後まで戦い続けよう、われわれこそが世界のチャンピオンなのだから」——彼を感じてきた痛みと疎外感が、「ライブアイド」で、楽曲「We Are The Champions」に魂を吹き込み、その歌声は、7万2千人のスタジアム観客と、その中継を見て

いた世界中の人々の心を揺さぶるのでした。

■流浪の民

ボヘミアンとは、流浪の民の意。これまでの伝統や習慣にとられない自由な人々を指すこともあります。映画のタイトルともなった楽曲「ボヘミアン・ラプソディ」では、「死にたくない、でもときどき生まれてこなければよかったと思う」という意味の有名な歌詞があります。それでも自らを貫き、生き続け走り続けることの辛さもまた、そこにあるのかもしれない。AIDS に侵されたフレディは、おそらく、自らの生と死を痛烈に見つめざるを得なかったことでしょう。そのうえで、劇中のフレディは、同情はもらえない、最後まで歌い続けたいという意思を示します。苦悩のその先には、われわれこそが勝者だ、という、自らと仲間への称賛、生への讃歌もまた、この映画にはあります。

終活用語の基礎知識

【音楽療法】

高齢者に対して、最近では「音楽療法」が評価されています。音楽療法の効果はさまざまに検証されていますが、たとえば高齢者の抑うつ症状の改善が認められたという報告があります¹⁾。日本では臨床研究が少ないためまだ保険適用はされていませんが、Queen の国であるイギリスなど、保険適用の治療として活用されている国もあります。

『ボヘミアン・ラプソディ』
(2018年 20世紀フォックス配給)
<http://www.foxmovies.jp.com/>
<http://bohemianrhapsody/>

● 1 Zhao K, et al. (2016) A Systematic Review and Meta-analysis of Music Therapy for the Older Adults with Depression. Int J Geriatr Psychiatry.

高齢者とペットロス

横浜国立大学大学院
環境情報学部・博士課程後期
二階堂千絵
にかいどう・ちえ

●ペットロスとは

「ペットは家族」という認識が一般的になり、ペットを亡くしたことによる悲しみ、いわゆるペットロスも、飼い主にはよくあることという認識が広がりまし
た。ペットを亡くした後、ふとした時に突然悲しくなり涙が止まらなくなる、疲



労感や倦怠感を覚えるなどの何らかの不調を感じるといった症状は「悲嘆反応」と言い、年齢や性別に関係なく、ペットを愛していた飼い主であれば不自然なことではありませんが、多くの場合時間の経過とともに薄らいでいくことがほとんどです。

●シニア世代の飼い主とペット

ところで、今現在我が国で犬・猫の飼育率が高いのは50代、次いで60代のシニア層であることはご存知でしょうか。犬や猫の寿命はおよそ15年程度ですから、例えば50代で飼い始めたとなると、そのペットが亡くなる頃、飼い主は高齢期に差し掛かります。高齢期は人生の円熟期と言えますが、子どもの独立、仕事のリタイア・セミリタイアなどによって環境に変化があったり、「ご自身やご家族・近親者の病、死別などによって社会関係が減ったりする時期でもあります。そんな時期にあるシニア世代にとって、ペットとの別れ、ペットロスはどのようなものなのでしょうか。

●二重の喪失としてのペットロス



先に述べたように、高齢期には様々な環境の変化があります。自分や家族の健康不安や体力・気力の低下など、必ずしも前向きに受け取れないものもあるでしょう。そのような心身と環境の変化の中でペットロスがあったとしたら、その影響は大きくなるかもしれません。

ペットフード協会による「シニアのペット飼育：苦勞しそうなこと」についてのアンケート調査で、犬を飼っている60〜70代の回答者では「自分や家族の病・気・入院・介護で、飼育自体が困難になること」「自分や家族の気力・体力が衰えて、飼育自体が困難になること」を苦勞しそうな点として回答する割合が高いことが分かりました。

飼っているのが犬ならば、多くの場合は毎日の散歩とそれに応じた体力が必要です。ペットの世話を通して、自分や家

族の健康不安や、体力・気力のネガティブな変化に引き合わなければならぬのがシニア世代の飼い主と言えるでしょう。向き合った結果、飼わないことを選択する人もいます。ペットロスによる悲しみを癒す手立てとして従来から言われていたのが新たなペットを迎えることですが、高齢期にある方は若年層と比べると、比較的寿命の長い犬や猫を新しく迎えることに抵抗を感じる人が多いのではないのでしょうか。そう考えると、高齢期にある飼い主がペットを亡くすということはその人に深い悲しみをもたらすだけでなく、多くの場合、今後ペットと暮らす可能性をも喪失することを内包した二重の喪失と言えるかもしれません。

●1 一般社団法人ペットフード協会(2018)
平成30年 全国犬猫飼育実態調査
<https://petfood.or.jp/data/chart2018/index.html>

ジェントロジー No. 08

2019年4月10日発行



編集・発行：
横浜国立大学 安藤研究室
「ジェントロジー」編集部
〒240-8501
神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-2
教育学部 第3研究棟 710号室
tel & fax: 045-339-3270
e-mail: andolab.ynu@outlook.jp
homepage: <http://www.ando-lab.ynu.ac.jp/>